



岐阜県へき地医療研修会の参加報告です。

◇ へき地医療体験から、持続可能な地域医療の未来を考える

少子高齢化やグローバル化に伴い、本格的な「超高齢社会」「多文化共生社会」に向けた医療体制の整備が求められています。関高SGH活動では、大学や病院と連携した医療体験セミナーや施設見学、医療関係者の講演などを行い、様々な課題について生徒自身が考える機会を設けています。岐阜県及び県北西部地域医療センターが主催するへき地医療研修会への参加も、そうした活動の一環として位置付けています。

◇ 平成29年度 へき地医療研修会の日程とプログラム

- 主 催： 岐阜県、県北西部地域医療センター
- 共 催： 自治医科大学卒業医師受入市町村会議
- 日 時： 平成29年8月18日(金)・19日(土)
- 会 場： 郡上市及びへき地診療所を有する近隣市町村
- 参加者： 県内の高校生、医学部生、県出身の医学部生
 - 1 フィールドワーク
グループごとに分かれ診療所や地域を見学・体験
 - 2 へき地・地域医療を語ろう
へき地やへき地医療について、ワークショップ形式で地域住民と語り合う
 - 3 交流会
参加者全員による夕食懇親会や、郡上踊り体験を通して交流を深める。

◇ 参加した生徒の感想文 ～へき地医療を考える～

朝日診療所・秋神診療所の訪問

1 診療所訪問

私が行った診療所は朝日診療所と秋神診療所というところでした。

朝日診療所は福祉センターと連携していて、診察・治療だけではなく、予防接種や予防講座なども行っていました。診療所は患者さんの病気を治すことだけが目的と思い込んでいた自分にとって、予防の考えはありませんでした。高齢者が多く、医師の少ないへき地では病気にかからないようにするということがまず大切であると気づきました。また、歯科医療機器も整っており、住民の健康を守る場所として大きな役割を果たしていると感じました。

秋神診療所はこじんまりとした診療所でしたが、先生1人と看護師の方が3人くらいいて、すごく落ち着いた安心できる空間でした。診察は、長時間待たされ、すぐ診察が終わってしまうような病院とは違い、患者さんとプライベートなことも話しながらゆっくり診察していました。医療機器がそこまで充実していないへき地では、丁寧な診察が患者さんの症状を判断する材料になるのだと感じました。医師の方との対話では、この丁寧な診察は、患者さんとの信頼関係を築き上げる上でも重要だと教えていただきました。へき地の医師は腕だけでなく、人柄もすごく大切なのだと思います。また、へき地では医師がすくないため、専門分野以外のことも取り扱わないといけないとわかりました。実際、秋神診療所では内科、小児科、外科を受診できるようになっています。専門でない分野は大学時代や、へき地に来る前に繋がった先輩に相談して対処しているそうです。医師としては、たくさんの知識を身につけられるいい機会だと思います。しかし、現在の医学部生の傾向としては一つの専門分野を極めたいという人が多いらしく、へき地に行きたがらないという意外な課題があることに気づきました。



2 地域の人との交流

研修の最後に、プログラムに参加した学生と地域の方で6人のグループを作り、お茶やお菓子を食べながら話し合う「ワールドカフェ」を行いました。住民の方は聴診器を当てて診察してもらっただけで安心できるというお話をされました。医師不足の中、こういう小さなことのように思える作業が信頼される医師になるのに大切なのだと感じました。しかし、へき地の医師の中には、研修期間が終わると大きな大学病院に帰ってしまう人もいて、長期にわたりへき地に残る医師が少ないという課題があるとわかりました。

3 研修を終えて

へき地医療は医療設備があまり整っておらず、医療サービスを住民が受けにくいというイメージがありました。しかし、在宅医療なども行っており、意外と住民が安心して受診できる環境は整っていると思いました。その一方で医師不足は、解決すべき喫緊の課題だと思います。もっと私たちのような若い世代がへき地医療を理解し、住民を安心させられる医師になるべきだと改めて考えた次第です。

白川診療所としゃくなげ荘の訪問

1 県北西部地域（郡上・荘白川地域）について

郡上市及び荘白川地域は人口のかなりが高齢者で、まさに高齢化の現象の著しい地域です。少子化が著しく、若年層の移住の増加が現れないことが問題となっている地域でもあります。たとえば、中枢病院まで救急車でいったとしても、地域によっては約40分かかるといふ現状もありますが、その一方で、白川郷や郡上踊りなど地域の伝統に根差した魅力もたくさんあります。

この研修で、へき地医療の在り方を話し合ったり、地域住民の方々と、これからの医療体制について実際に話し合ったりしてきました。さらにこの2日間、同じ研修班となった人たちと意見を出し合い、地域医療への意識を高めることもできました。

2 白川診療所への訪問

私は白川村の白川診療所を訪れました（右写真）。午前の診療が終わる頃に行ったにもかかわらず、多くの人たちがまだ診療を待っていたので、大変さが伝わってきました。診療所は通常の医療活動の場であると同時に、薬が保管されている場所でもあります。薬局のように、その場で薬がもらえる場所でもあるとわかりました。

担当の黒川先生から、診療所のことやへき地医療についてうかがいました。病院より規模が小さい診療所でもレントゲンやエコーなどの基本的



な器具はあり、かつては人工透析をここで行なっていたことがあったそうです。さらに、生活習慣のアドバイスもしていると聞きました。また、地域で開催される祭りなど、地域の行事にも積極的に参加していると聞き、地域に根差した医療を行っていることがわかりました。

地域医療の役目についても詳しくうかがいました。黒川先生によれば、この地域で多い症例を分析して起こりやすい病気を把握し、あらかじめ予防できるように患者さんに注意を促しているそうです。地域医療は地域と密着していることを生かして、来た患者さんの治療をするだけでなく、予防するために努めることも大切なことだと学びました。また、病院に来るのが困難な人のために、訪問医療も積極的に実施されていることがわかりました。地域医療に取り組む医師は、幅広い知識を知っておく必要があると思います。

この研修に参加するまで、へき地の医療施設ではひとりの医師が施設管理しているというイメージがありました。実際はローテーションを組んで負担を軽減していることがわかりました。医師にとっても働きやすい環境を作っているのだと思います。

黒川先生によれば、一番大切なことは地域の人との信頼関係を培っていくことだそうです。だからこそ、都市部の病院とは違うやりがいがあるのだと思いました。

3 シャくなげ荘の訪問と郡上踊り

診療所の近くにあるデイサービスを行なっている「シャくなげ荘」を訪問しました。ここでは楽しく自由に活動していました。通っている人の話では、折り紙や将棋をおこなっていて、みんなそれぞれやることは違うそうです。また、家までデイサービスの車が来てくれるため、助かると話していました。

郡上踊りに訪れた際は、高齢者だけでなくいろいろな方が話しかけてくれるというとても親しみやすい雰囲気があり、驚きました。このような地域性は居心地がよく、楽しかったです。

4 地域の人との交流

この交流では、地域の人からみた地域医療について聞くことができました。多くの人が最初におっしゃったことは、「本当に親身になってくれる」ということでした。今ここで働いている医師の方々は信頼されていると感じてすごいと思いました。

その一方で今後もずっと、現在従事している地域で働いてもらいたいという意見がありました。実際に、地域医療では手術など高度なことはできないため、都市の病院へ移り、そこで高度な医療を学ぶ医師がいるそうです。しかし地域の方にとっては、信頼関係ができあがっている医師がいると安心できるそうです。「頼りにされる医師」になることは、へき地医療を発展させて行く中の重要事項です。そして、このことについては双方への支援が必要だと感じました。医師が頼りにされていることが分かり、こういうことが地域医療の魅力だと感じました。

都市の病院へ緊急で行く時は、ドクターヘリがほとんどだそうです。しかしそれまでの対応は地域の医師です。地域の医師には高い能力が必要だと感じました。

5 全体を通しての感想

地域医療についてなかなか実際に聞く機会が少ない中で、こういう機会があってよかったです。今までのへき地医療のイメージは設備も乏しく、利用も不便だと思っていました。しかし、診察する分には大病院と変わらない設備があり、診療所の近くにはバス停があるなど利用しやすい環境があることがわかりました。その点については足腰が弱い高齢者にとって、利点となることだと感じました。さらに医療関係者と住民の関わりが穏やかなもので雰囲気が温かいと感じました。

SGH 活動の一環で、夏に僻地医療研修会に参加しました。

これまでにも、僻地医療の講座を受けてきましたが、やはり、実際にどういう状況なのかを見て、それについて仲間と考えたことで、僻地医療の現場と課題が見えてきました。

